

八代市における新築住宅の「公室」と「私室」

著者	鳥飼 香代子, 佐藤 栄希子, 北川 晶, 今里 美幸
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	47
ページ	45-56
発行年	1998-12-18
その他の言語のタイトル	Public Rooms and Private Rooms of New Houses in Yatsushiro District
URL	http://hdl.handle.net/2298/1105

八代市における新築住宅の「公室」と「私室」

鳥飼香代子・佐藤栄希子*・北川 晶*・今里美幸**

Public Rooms and Private Rooms of New Houses in Yatsushiro District

Kayoko TORIKAI, Ekiko SATO, Aki KITAGAWA, and Miyuki IMAZATO

(Received September 1, 1998)

We wish to know the recent trend of Tsuzukima Floor plans and Koushishitu Floor plans by looking at which ones have been increasing in Yatsushiro district. Last year we researched the floor plans of all the new houses. The results show that about half of the floor plans in new houses are "Tsuzukima" and the rest are "Koushishitu" plans. Why are "Tsuzukima" plans declining? In order to answer this question, we examined how to use public rooms and private rooms in the "Tsuzukima" and "Koushishitu" plans.

The results are the following : 1)almost all of the members do something together in the public rooms, but some do something by themselves in the public rooms, instead of only using private rooms ; 2)almost all of the members do something by themselves in the private rooms, but some do something by themselves in the public rooms. instead of only using private rooms ; 3)the use of public rooms and private rooms overlap because of watching TV, using the telephone, other entertainment, home work etc ; 4)this overlapping tendency is popular in both plans ; 5)we think both plans will not disappear, because they are flexible plans.

keywords : public room , private room , Tsuzukima , Koushishitu

1. はじめに

戦後の熊本の支配的住宅平面は、いわゆる続き間を住宅の中心にとる「続き間型」住宅であり¹⁾, 気候風土上の理由, あるいは地縁・血縁関係の強い中での客間要求や伝統性の追求などにより, 現在も支持されている。「続き間型」住宅は住まい方からみると, 伝統性の追求と接客室要求に裏づけられた格式性を付与することを最重点に考えているために, 居室どうしの連続性が強く, 個室となる独立した空間は存在しないことが多いという特徴を持つ。

一方で, 高度成長期以降, 大都市圏を中心に普及してきたといわれるのが「公私室型」住宅で, 家族生活を営む「公室」と, 家族員の「私室」から構成される²⁾。近年は, それが地方都市にもみられるようになってきており, それは熊本についても例外ではない³⁾。ただし, 熊本では完全な「公私室型」住宅というよりも, 「続き間型」住宅をベースとして, 「公私室型」住宅の空間要素を一部に取り入れているような住宅が見受けられる。

このような住宅建設動向のなかで, 本論文では住まい方からみて, 「公私室型」と「続き間型」住宅が今後どのような変化をみせるのか, どちらか一方に収斂していくのか, あるいは一部を取り入れた融合型の形成に向かうのか, その変化を把握することを目的とする。

「続き間型」住宅と比較すると, 「公私室型」住宅は個室となる独立した空間, すなわち「私室」

* 熊本大学大学院教育学研究科家政教育修了

** 熊本大学大学院教育学研究科家政教育2年

が確保できることが、第一の大きな差である。この個室要求が「公私室型」住宅を選択させている要因の一つと考えられる。つまり、今日の私的行為の特徴をみることが重要となる。第二の差は「公室」である。「続き間型」住宅では居間³⁾をもつ場合ともたない場合が見られるが「公私室型」住宅では、明確に居間をもっている。居間をもたない「続き間型」住宅は今日ではあまり見られないことから、居間要求についてはかなり強いと考えられる。しかし、「続き間型」住宅と「公私室型」住宅の居間の使われ方については、十分に検討されているとはいえない。従って公的行為についての検討も重要である。さらに、「接客室」⁴⁾について「続き間型」住宅は続き間を持ち、「公私室型」住宅は座敷か洋室の空間である。この接客室要求についても方向性は明確ではないため、社会的行為についても注目する必要がある。これらの点を分析の視点に据え、住宅における生活行為（公的行為、私的行為、社会的行為）の今日の特徴をみていく。

2. 研究の方法と調査世帯

本研究における調査方法は以下のとおりである。

住まい方調査の対象地域として、熊本県八代市を選出した。調査期間は、平成9年9月11日から17日までの7日間と、10月1日から7日までの計14日間である。当初は、無作為に抽出した新築戸建住宅の居住者に対して、事前交渉なしに住まい方調査を依頼した。しかし、この方法では調査を断られる確率が非常に高かった。調査が長期化すると季節が移行し、それに伴って人々の住まい方にも変化が生じる恐れがあるために、対象住宅の選出方法を次のように切り換えた。まず、八代市内全域において、新築戸建住宅と思われる住宅を、調査者の任意により無作為に抽出した。そして、それらの住宅に調査協力のための文書を直接配付し、調査への協力を仰いだ。その後、電話連絡によって了解を得られた住宅に対して調査を実施した。配付した文書は200通余りで、八代市内の全地域に配付した。了解を得られ調査を実施した結果、有効調査数は78例であった。

住まい方調査の項目は、次のとおりである。

- i) 住宅平面の採取（家具の配置、設備、平常時の扉の開閉状態）
- ii) ヒアリング調査
 - ・住所、世帯代表者の氏名、電話番号、家族員数、家族構成、家族形態
 - ・各家族員の年齢、各家族員の職業および属性
 - ・築年数および増改築年数、敷地面積、延べ面積、土地の入手方法、住宅の供給形態、供給主体
 - ・寝室の有無とその場所、寝室以外の自室の有無、各家族員が生活行為を行う具体的な場所（行為…食事、軽食、テレビの視聴、新聞を読む、電話をする、就寝、着替え、音楽をきく、仕事、親しい客の接客）

3. 結果および考察

1. 調査対象地域と世帯

熊本県八代市の人口は、熊本市に次いで2番目に多い⁵⁾。平成7年度現在において八代市の産

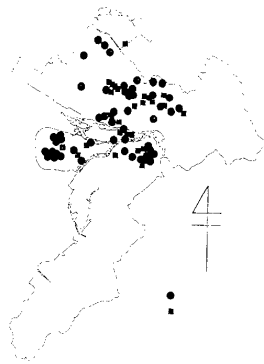


図1 対象住宅の分布

業人口は 52,500 人で、このうち農業従事者は 7,200 人で、第 1 次産業人口の大半を占めている。第二次産業人口は 13,700 人で、第 3 次産業は 31,200 人である。持ち家総数は 22,500 世帯で、このうち一戸建は 22,200 世帯である⁵⁾。また、一般世帯数 34,600 世帯のうち核家族世帯は 19,800 世帯で、親族世帯（同居世帯）は 7,700 世帯である⁵⁾。

今回の調査を行った対象住宅の分布を図 1 に示す。●印は同居家族世帯を指し、■印は核家族世帯である。同居家族世帯は 51 世帯、核家族世帯は 27 世帯であった。調査依頼の文書は、八代市全域に配付したが、結果として住まい方調査の対象となった世帯は、八代市北部を中心に分布するものとなった。

今回の住まい方調査において、調査を行った住宅の特徴をみってみる。対象となった 78 例については、平均築年数は 4 年 10 か月であり、新築の後、住まい方が一応定着した世帯といえる。

敷地面積について、熊本県における持家戸建住宅の平均面積は、 361m^2 である⁶⁾。住まい方調査を行った住宅の敷地面積は、 $300 \sim 499\text{m}^2$ のものが最も多く、県平均と比較してやや広めの敷地面積を持つ住宅が多かった。延べ面積については県平均が 97m^2 である⁶⁾。調査世帯においては、出窓や玄関ポーチなどが明確でないものが出てきたので、延べ面積ではなく居住面積として算出した。延べ面積から約 8m^2 前後の面積を差し引いたほどで、両者を比較することに大きな差し支えはない。そこで、今回調査を行った住宅の居住面積は、78 例中の 35 例が $150 \sim 199\text{m}^2$ に集中しており、敷地面積と同様に規模の大きい住宅であることがわかる。

住宅の供給形態は、調査した住宅のすべてが注文住宅であった。

供給主体は、次の 4 つに分類した。まず、八代市内の個人大工を「地元大工」、八代市内において住宅づくりをする中小の会社組織を「地元工務店」、そして全国的に事業展開している住宅会社を「大手メーカー」とした。また、八代市外の大工や工務店、居住者自らが設計した住宅については「その他」とした。調査世帯の中で最も多かったのは「地元大工」で、78 例のうちの 36 例が該当する。また、次に多かったのは、「地元工務店」で 20 例にみられた。「大手メーカー」は 17 例、「その他」は 5 例であった。

土地の入手方法については、78 例のうちの 57 例が親から相続することによって、現在の土地を所有していた。残りの 27 例は、住宅を新築するにあたって土地も購入していた。相続入手の多さが、土地の広さや「地元大工」供給が多いことと関係があるといえる。

最も多かった職業は「会社員」であり、78 例中に 41 例、次に多かったのは「専業農家」の 18 例で、この他には「自営業」が 9 例、「無職」が 6 例であった。

家族形態は、老世代と若夫婦世代などからなる同居家族が51例、核家族が27例である。家族員数は、同居家族においては家族員6人が最も多く51例のうちの18例であった。その次に、5人の家族員を有する世帯が13例と続く。核家族については、家族員数が3人の世帯が27例中に11例みられ、最も多かった。それに次いで、4人の家族員の世帯が8例であった。

本調査の住宅平面は4つのタイプに分けられた。それらの代表例を図2から図4'に示す。

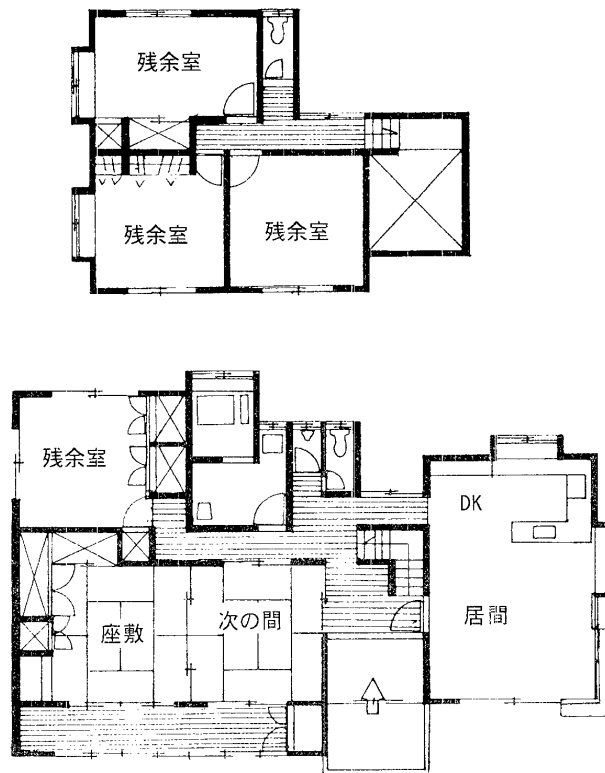


図2 代表的平面 1型

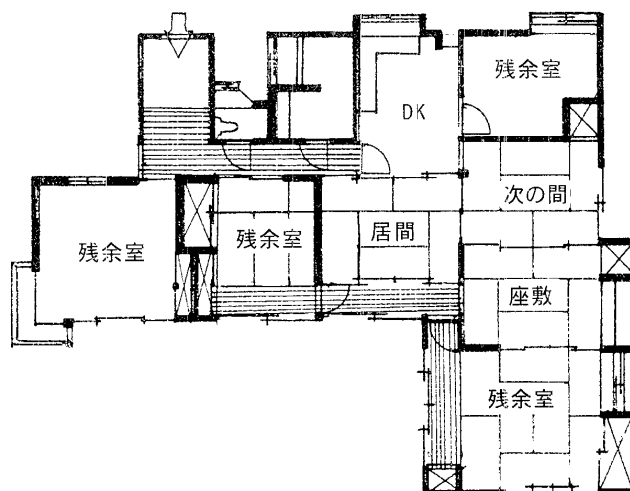


図3 代表的平面 2型

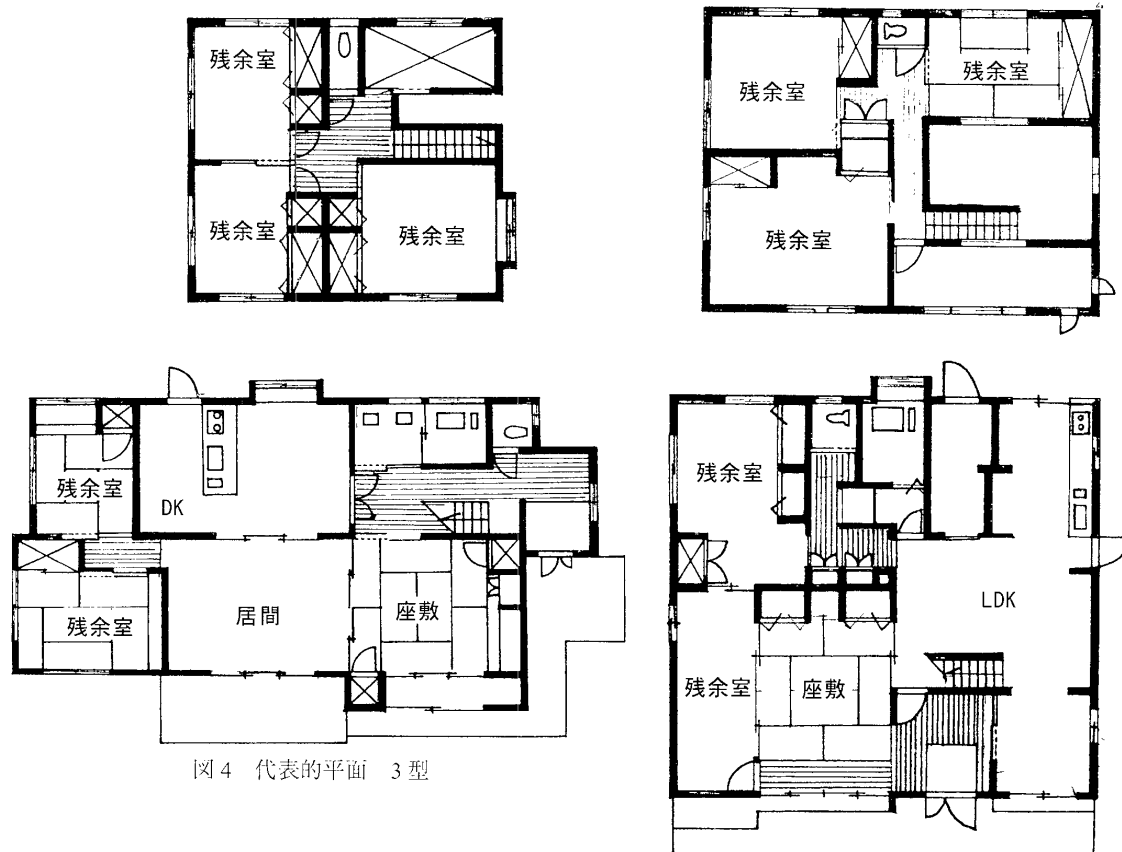


図4 代表的平面 3型

図4' 代表的平面 4型

2. 生活行為について

今回の住まい方調査において、ヒアリング調査を行った生活行為は計10項目で、基本的には人々がほぼ毎日行うと思われるものである。ヒアリング調査は、各生活行為を住居内のどの空間で行うか尋ねた。分析にあたっては、各生活行為をそれらの性格を考慮して、前述したように、公的行為、私的行為、社会的行為の3つに大別した。

各生活行為を以下に説明する。まず、公的行為とは、使用する設備や器具の設置場所の兼ね合い上、家族員どうしでそれらや空間を共有する行為である。そして、主としてコミュニケーションを伴う生活行為でもある。したがって、結果として「公室」において行われがちな生活行為となる。本研究において公的行為は、5項目の生活行為を〈だんらん行為〉、〈ものを共有する行為〉の2つにグループ化して、それらの行われる空間を分析する。次に、私的行為とは、基本的に個人で行う生活行為であり、プライバシーを要する。したがって、「私室」において行うと思われる行為である。分析にあたっては、計4項目の生活行為を2つのグループに分けている。ひとつは、〈特に個人的な行為〉で、もう一方は、この他の〈個人的な行為〉である。どの生活行為に該当するのか判断が難しい回答は、住み手が生活行為の各項目で回答した答えを尊重することにした。社会的行為とは、住居内において行われる生活行為の一つなのだが、その行為の対象となるものが来客など対外的なものとなる。今回は社会的行為を〈接客行為〉とした。

- ・公的行為：〈だんらん行為〉……………（食事、軽食、テレビの視聴）
 〈ものを共有する行為〉……（新聞を読む、電話をする）
- ・私的行為：〈特に個人的な行為〉……………（就寝、着替え）

- ・〈個人的な行為〉……………（音楽をきく，仕事）
 ・社会的行為：〈接客行為〉……………（親しい客の接客）

質問方法は，各生活行為をどの居室で行うかというものである．家族員はその住居に現在住んでいる者に限定し，すべての家族員の生活行為を行う場所を尋ねた．また，一つの生活行為の行われる場所が複数列举された場合はその場所の使用される頻度も確認した．

集計方法は次のとおりである．一つの行為に対して，それを行う空間が複数列举されたり，家族員によってそれを行う場所が異なることもあるので，同じ世帯内においても最も使用頻度の高い空間は複数回答となる．それらを一つひとつの居室ごとにふり分け，世帯数を延べ数で表した．

表1. 最も使用頻度の高い空間（食事）

場 所	延べ世帯数	計
計		89
DK		67
居間		17
次の間		1
残余室（自室）		3
残余室		1

表2. 最も使用頻度の高い空間（軽食）

場 所	延べ世帯数	計
計		100
DK		39
居間		42
次の間		1
残余室（自室）		13
残余室（寝室以外の自室）		2
残余室		1
残余室（他の家族員の自室）		1
しない		1

表3. 最も使用頻度の高い空間（テレビの視聴）

場 所	延べ世帯数	計
計		116
DK		8
居間		67
座敷		2
次の間		2
残余室（自室）		28
残余室（寝室以外の自室）		1
残余室		4
残余室（他の家族員の自室）		3
その他		1

表4. 最も使用頻度の高い空間（新聞を読む）

場 所	延べ世帯数	計
計		99
DK		29
居間		50
座敷		1
次の間		2
残余室（自室）		9
その他		8

表5. 最も使用頻度の高い空間（電話をする）

場 所	延べ世帯数	計
計		106
DK		31
居間		35
座敷		1
次の間		1
残余室（自室）		19
残余室（他の家族員の自室）		3
残余室		1
その他		9
不特定		6

表6. 最も使用頻度の高い空間（就寝）

場 所	延べ世帯数	計
計		113
居間		2
座敷		6
次の間		13
残余室（自室）		77
残余室		1
残余室（他の家族員の自室）		12
その他		2

表7. 最も使用頻度の高い空間（着替え）

場 所	延べ世帯数	計
計		125
居間		13
座敷		3
次の間		12
残余室（自室）		69
残余室（寝室以外の自室）		6
残余室		1
残余室（他の家族員の自室）		3
残余室（他の家族員の寝室以外の自室）		2
その他		16

表8. 最も使用頻度の高い空間（音楽をきく）

場 所	延べ世帯数	計
計		97
DK		4
居間		11
座敷		2
次の間		2
残余室（自室）		52
残余室（寝室以外の自室）		3
残余室		3
残余室（他の家族員の自室）		9
その他		2
しない		9

表 9. 最も使用頻度の高い空間（仕事）

場 所	延べ世帯数	計
計		88
DK		2
居間		9
座敷		4
次の間		1
残余室（自室）		17
残余室（寝室以外の自室）		9
残余室		1
残余室（他の家族員の自室）		2
その他		4
しない		39

表 10. 最も使用頻度の高い空間（親しい客の接客）

場 所	延べ世帯数	計
計		138
DK		11
居間		71
座敷		7
残余室（自室）		39
残余室（寝室以外の自室）		1
残余室		6
残余室（他の家族員の自室）		1
その他		2

2-1 〈だんらん行為〉について

「食事」

食事はDKに集中している（表 1）。全体の延べ世帯数をみると、DKで食事をしている世帯と居間で食事をする世帯を総合すると「公室」で食事をするのは84例となる。「その他」の空間である残余室で食事をする世帯が1例あるが、これは平面図上では居間とはみなされていないが、実際の使い方としては居間として使用されている居室なので、事実上居間で食事していると考えてもよい。この他には、自室で食事をする世帯が3例みとめられ、理由は祖母の足が不自由であったり、父が寝たきり、曾祖母の食事の時間がずれているなどであった。そして、次の間の1例についてはここが父の専用自室となっており、二人暮らしの息子と食事時間がずれているために使用されていた。したがって「私室」の利用は4例となる。このように、DKまたは居間以外の居室で食事をする理由は、いずれも特殊例であった。

以上のことから、食事は「公室」であるDKおよび居間でとられることが多いことが判明した。

「軽食」

軽食をとる空間として（表 2）多く使用されていたのは居間であり、それに次いでDKが使用されており、居間とDKの使用はほぼ同程度であり、「公室」として合計すると81例にものぼる。「その他」の空間である残余室⁷⁾の使用が1例みられるが、この残余室は居間として使用されているので実生活においては居間で軽食をとっていると考えてよい。「私室」となる自室で軽食する場合は13例、寝室以外の自室も2例みられた。「接客室」である次の間を使用する1例も、父の専用自室であるので使われ方の面では自室と同等であるとみなすことができる。また、他の家族員の自室でとる世帯も1例みられた。この他には、「その他」の空間となる併設する店舗の使用が1例みられた。

「テレビの視聴」

テレビを見るために最も使用されていたのは居間であり（表 3）、DKも少数認められた。「私室」である自室の使用は、116例中に29例みられた。「接客室」の座敷および次の間の使用はそれぞれ2例ずつ認められた。「その他」の残余室は4例で、このうち1例は居間の性格の強い残余室である。この世帯にはこの居室のほかに平面上の位置、使われ方ともに居間とみなされる居室も存在しているので、この残余室は第二の居間的な存在である。もう1例は平面上では居間とみなされないが、使われ方としては居間的な居室であった。残りの2例のうちの1例は応接間、もう1例は子ども室の性格の強い残余室であった。他の家族員の自室は3例、このほか店舗でテレビを見る世帯が1例みられた。

2-2 〈ものを共有する行為〉について

「新聞を読む」

新聞を読む空間は、「公室」である居間の使用が最も多かった（表4）。DKで読む場合も多い。「私室」である自室の使用は8例と少ない。「接客室」の使用は、座敷が1例、次の間が2例であった。「その他」の空間としては広縁が2例、トイレが2例、玄関が1例認められた。

「電話をする」

電話をする空間は世帯によってさまざまであった（表5）。そのなかでも最も使用されていたのは「公室」である居間であるが、同じ「公室」であるDKの使用もかなり多く、居間とDKの使用はほぼ同程度とみなすことができる。これらに次いで多く使用されていたのは「私室」である自室の22例であった。この他の居室は残余室、座敷および次の間が、それぞれ1例ずつにおいて使用されている。残余室の1例は子ども夫婦の居間的な居室であった。また、電話は他の生活行為に比べて居室以外の空間が使用されていることが多かった。具体的には玄関ホールにおいて5例認められ、この他には1階ホール、1階廊下、勝手口がそれぞれ1例ずつである。自営業を営んでいるために、店舗において電話をするものが1例であった。また電話をする空間が不特定なものが6例みられた。

以前に比べると、1世帯あたりの電話機の所有数は確実に増えており、移動や携帯可能な電話機の出現によって電話をする空間が特定できない世帯が目立った。またそれらの電話機の普及により、会話の内容や電話をする時間帯によっては自室においても電話をする傾向がみられた。

2-3 〈特に個人的な行為〉について

「就寝」

就寝は、延べ世帯数のうち多くが「私室」である自室でとっていた（表6）。その次に多く使用されていたのは「接客室」の次の間で、13例にみられた。しかし、このうちの12例の次の間は、日頃から特定の家族員が自室として使用している。また座敷の使用は6例にみられ、これについてもそのいずれもが日頃から特定の家族員が自室として使用している。残りの1例は、家族員が各自室を確保しているのだが、子どもが幼く、また自室として確保した2階部分が入居間もなく片づいていないということで、家族3人が座敷で就寝している世帯である。「その他」の空間においては、残余室が1例で、これは自室を確保しながらも就寝のみここでしているものである。他の家族員の自室は12例であった。他の家族員の自室で就寝しているのは、12例のうち11例が子どもで、自室を持ちながらも親の自室で就寝している。残りの1例は母が子どもの自室で就寝しており、いずれにしても子どもは乳幼児から小学校低学年の幼い子どもであった。居間を使用している2例のうちの1例は老人の転用自室で、本来なら老人室とするはずの居室が鬼門にあたるということで、その部屋は使用せずに居間を自室がわりに使用している。

「着替え」

着替えは、「私室」である自室が使用されることが最も多く、延べ世帯数125例のうちの75例にみられ全体の過半数を占めた（表7）。自室に次いで多く使用されていたのは「公室」である居間で13例であった。使用している家族員のほとんどが子どもであり、13例のうちの12例が該当する。年齢は小学校中学年以下であり、すべての子どもが個人またはきょうだいと共有する個室を所有している。一方、自室で着替えている子どもに注目すると、自室で着替える子どものいる世帯は47例60人であり、年齢は小学生以下が6人、中学生から高校生までが19人、18歳以上が25人であった。次の間を使用するのは12例で、そのうちの3例の次の間は特定の家族員の専

用自室, 5 例は転用自室であった。他の 4 例はいずれも一部の家族員が, 次の間のパイプハンガーなどに衣類を置いてありそこで着替えている。また, 座敷は 3 例で使用されており, このうち専用自室が 2 例みられた。残りの 1 例は, 一部の家族員が座敷に衣類を置いてあるためであった。そして, 残余室（他の家族員の自室）が 3 例, 残余室（他の家族員の寝室以外の自室）も 2 例みとめられた。どちらの場合においても, 5 例とも衣類を収納するタンスがなく, 残余室（他の家族員の自室）または残余室（他の家族員の寝室以外の自室）にタンスを置いているためにそこで着替えている。この他には, 脱衣所が 9 例で, このうちの 6 例は専業または兼業農家であった。これらの世帯の 2 番目に使用頻度の高い空間をみると, 4 例が自室を使用しており, 日頃は農作業用の衣服に着替えるときに脱衣所を使用し, 正装などをする場合に自室で着替えている。したがって, 農家の脱衣所は他の職種の世帯に比べて重要度が高い。この他には洗面所が 4 例, 納戸, 土間, トイレの前が各 1 例ずつであった。

2-4 〈個人的な行為〉について

「音楽をきく」

音楽をきくために使用されていた空間は, 「私室」である自室が最も多く延べ世帯数 97 例中の 52 例にみられた（表 8）。寝室以外の自室の使用は 3 例みられる。「公室」である居間を使用している世帯は 11 例で, 使用数では自室に次いで使用数が多い。しかし, それでも両者の使用数の差は大きく開いている。その次に多く使用されていた空間は, 他の家族員の自室の 9 例であった。これらの他には DK が 4 例, 座敷が 2 例, 次の間が 2 例, 残余室が 3 例であった。特殊な世帯としては店舗が 1 例, 車庫の上階が 1 例あり, 本来音楽をきくことはないと回答した世帯は 9 例であった。

「仕事」

仕事は, そもそもしないと回答した世帯が 39 例で, 延べ世帯数全体の約半数を占めた（表 9）。仕事はそれを行う者が少ない生活行為の一つなのだが, 子夫婦（父または母のいずれか）を中心に行われる行為である。そのなかでも, 「私室」である自室で仕事をする と答えた世帯は, 延べ世帯数 89 例中に 17 例と最も多かった。寝室以外の自室の使用は 9 例みられ, 質問したどの生活行為よりも少なかった。「公室」である居間で行う場合は 9 例で全体のなかでは少なくはない。DK を使用している世帯は 2 例で, 座敷は 4 例, 残余室（他の家族員の自室）は 2 例において使用されている。また, 次の間および残余室が各 1 例ずつで, 残余室については母親の書斎的な性格が強い。この他には納屋, 店舗, はなれの土間, 別棟がそれぞれ 1 例ずつみられた。

職業との相関をみたが, 持ち帰りの仕事でなおかつ住居内においてされるものに限定して質問したので, やはり会社員や公務員がほとんどであった。そして, 仕事に使用する空間は趣味と同じくばらつきが目立ったが, 他の生活行為と比較して寝室以外の自室の使用の多いことが特徴である。特に, 教員などの世帯において, 個人が寝室とは別に自室を必要とする傾向にあった。

2-5 〈接客行為〉について

「親しい客の接客」

「親しい客の接客」は, 延べ 138 例中のうちの 71 例が「公室」である居間で行っており, これは全体の過半数を占めている（表 10）。残余室を使用する 6 例中の 1 例は居間として使用されているので, これも居間と同等であるとみなすことができる。それに次いで使用の多かったのは, 「私室」である自室での接客で 30 例であった。寝室以外の自室の使用は 1 例みられた。しかし,

座敷で接客する7例のうち1例は座敷が父の専用自室であるので、使われ方としては自室と同様に考えてよい。また残余室6例のなかの1例も特定の家族員の自室とは認識されていないが、子ども室の性格が強いため、これも自室で接客していると考えられる。残りの残余室4例の内訳は、2例は応接間で、あとの2例は特定の家族員の居室とは認識されていない残余室であった。少数世帯としてはこの他に、併設する店舗においてが1例、はなれの小屋の土間で接客する場合が1例みられ、後者は兼業農家である。他の家族員の自室も1例みられた。

以上より、親しい客の接客は全体的に居間を中心に行われることが判明した。しかし子どもに限っては、居間よりも自室での接客のほうが多く、親しい客の接客は子どもを中心に居間から自室へと拡大傾向にあるといえる。

4. 結論

最後に、今回の調査によって明らかになった点をまとめて本論文の結論とする。

「公室」においては、〈だんらん行為〉を中心とした公的行為が、主として行われていた。しかし、「着替え」などの私的行為も「公室」に持ち込まれる傾向がみられた。これは、幼児や小学校低学年程度の子どもが中心となっている。

「私室」で行われる多くの生活行為は、「就寝」や「着替え」などの、当初から私的行為とみなしていたものであった。しかし、「公室」において行われると思われていた生活行為のなかのいくつかについては、その行為が行われる空間が「公室」から離れて「私室」へと移行しているものも出現していた。具体的には、「テレビの視聴」および「電話をする」などである。「テレビの視聴」は、居間において行われることが最も多いのだが、テレビの個別所有が進んだ結果、個人の嗜好に合わせて放送番組を選択することが可能となり、「私室」においても個人的な行為として行われるようになったのではないかと推察される。「電話をする」という行為についても、それ自体は個人で行うものであるが、親子電話などの所有数の増加に加えて、携帯電話の出現によって「私室」においても行われていた。この2つの行為は、6項目ある公的行為のなかでも「私室」の利用がとりわけ顕著なもので、この他のすべての公的行為においても、程度の差はみられるものの従来は「公室」で行われていた行為が、「私室」へと確実に持ち込まれていた。

「接客室」である続き間および座敷は、改まった客を招く場合に使用されていると考えられる。しかし、親しい客の場合は、そのような「接客室」があるにもかかわらず、居間などの「公室」、または「私室」の使用が多かった。

このように、住居内の「公室」と「私室」、そして「接客室」においてさまざまな性格の生活行為の混在がみられる。従来、「公私室型」住宅において、人々の生活は「公室」においては非個人的な行為を行い、一方の「私室」で個人的な行為を行うとされてきた²⁾。そして、今回調査を行った住宅は、複数の独立した「私室」を持つものであったため、そのような住まい方を想定していた。しかし、現実の生活は「公室」である居間などにおいても、あらゆる行為が持ち込まれているという結果となった。この点については以前から指摘されているところであったが、「公室」が雑多な生活行為を受け入れる空間となっている、すなわち個人的な生活行為が「公室」においても行われるということを示すにとどまっていた。しかし、今回の分析結果において、これまで「公室」で行われることが当然であると思われていた公的行為も、「私室」に取り入れられつつあるという点が明らかになった。この傾向は、まず第一に「私室」が確保されていても、「公室」に

において行われる生活行為は秩序化されていないということを意味している。そして、第二に「私室」を確保することによって、私的行為は「私室」に、公的行為は「公室」のなかにそれぞれしっかりと包含されるのではなく、私的行為が「公室」へとはみ出しながら、さらに公的行為を「私室」へと取り込みつつあることがいえる。

したがって、現在の「公私室型」住宅の住まい方において、「公室」と「私室」は明確には区分されておらず、私的行為の「公室」へのはみ出しだけではなく、公的行為の「私室」への流入がみられる。したがって、今回の調査によって判明した各生活行為の行われる空間をみるかぎり、「公室」および「私室」で行われる生活行為は不明瞭化の傾向にあるといえる。また、続き間も夫婦や個人の自室として日常的に使用する世帯がみられ、純粋な接客空間ではなくなりつつあるといえる。

以上を総合すると、「公室」、「私室」、「接客室」はそれ独自の機能だけではなく、他にも生活におけるさまざまな機能を果たしているといえる。したがって、八代市においては今後も「公私室型」住宅と「続き間型」住宅は融合あるいは併存していくことが推測される。

今後の課題を以下に述べる。本研究は、八代市における「公私室型」住宅と支配的住宅平面である「続き間型」住宅の折衷に関する初めての分析を試みたものであるが、「私室」に関する分析が一定不足しているため、今後はさらに「私室」の分析を深める必要があると思われる。

続き間は一定の敷地面積などの条件の下、これから先も存在し続けていくのではないかと思われる。その根拠としては、続き間を空け室化⁸せず、個人または夫婦の個室としても使用されていることなどがあげられる。これまで続き間は、機能分化の考え方によって合理化の対象になったり、「封建」的な視点で扱われがちであった。しかし、これからはその転用性により注目し、新しい“住宅の豊かさ”観の形成を促す、一つの要素となる可能性も持っていると思われる。

謝辞

最後に、研究活動の手助けをして下さった同研究室卒業の石谷美由樹さん、長井里奈さん、牧野佐和子さん、さらに調査に応じていただいた対象者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

注及び参考文献

- 1) 「続き間型」住宅が支配的な型であったことについては、次の文献で指摘した。
■鳥飼香代子：住宅 vol. 30, 熊本・鹿児島県の住宅—支配的な続き間型—, 1981, PP.74 ~ 80
■鳥飼香代子・北川晶・佐藤栄希子：熊本県八代市における続き間型平面の衰退, 熊本大学教育学部紀要, 第 46 号, 自然科学, PP.249 ~ 258, 1997
- 2) 「公私室型」住宅については、多くの論文が書かれているが、次のものが最新のまとめである。
■住田昌二編著：『現代住まい論のフロンティア』, 住田昌二, 「住まいの近代化の検証と展望」, ミネルヴァ書房, PP.1 ~ 43, 1996
- 3) 居間とは、DKと1間以上の開口部でつながった空間のことであり、「公室」の代表的空間の1つである。参考文献は2)と同じ。
- 4) 接客室については、「公私室型」住宅においては「公室」のうちの1室と考えられているが、「続き間型」住宅においては「続き間」が該当する。「公室」と「続き間」は成立過程が異なるため、ここでは「接客室」は「公室」「私室」とは独立した概念として位置づけ、別個に扱った。したがって、本稿の

空間要素は、「公室」「私室」「接客室」となる。

- 松原小夜子・住田昌二・鳥飼香代子：続き間独立住宅に関する研究－続き間型住宅の平面形成と住まい方の特徴－，日本建築学会計画系論文報告集，第 363 号，PP.27 ～ 37，1986

参考文献は 2) と同じ。

- 5) 八代市については以下の資料を参照した。

- 平成 7 年国勢調査報告，第 2 巻都道府県・市区町村編，その 43 熊本県，P.2，P.142，P.184，P.200，総務庁統計局，1995

- 6) 熊本県の住宅については以下の資料を参照にした。

- 平成 5 年住宅統計調査報告，第 3 巻都道府県編，その 43 熊本県，P.60，P.62，総務庁統計局，1993

- 7) 残余室とは，住宅の空間要素から D K，居間，接客室を除いた居室のことで，「私室」となる可能性の強い居室のことである。

- 鳥飼香代子・住田昌二：創設高齢者同居住宅における親世帯と子世帯の居住分離傾向－地方における高齢者同居世帯の住様式論的研究その 1－，日本建築学会計画系論文集，第 468 号，PP.121 ～ 131，1995

- 鳥飼香代子・住田昌二：創設高齢者同居住宅における親世帯と子世帯の居住分離傾向－地方における高齢者同居世帯の住様式論的研究その 2－，日本建築学会計画系論文集，第 486 号，PP.117 ～ 127，1996

- 8) 続き間の空け室化とは，続き間を日常生活には使わないで空けておくことである。4) の参考文献で定義されている。